

徳島県人になりきつた福島義一先生

日本医史学会理事 長門谷 洋 治

日本医史学会名誉会員であった福島義一先生（一九一〇～一九九七）は、本学会会員名簿の「専攻・関心領域」の項に「眼科学史、徳島県の医学史、本草学史、洋学史」と記されていた。これは先生のご専門をよくあらわしているが、その各々が別々にあるのではなく、あい関連していることが多かった。たとえば高（こう）良齋である。彼は眼科を得意とした徳島県出身の洋学者で、博物学にも通じていた。

先生の多数の著作のうち『高良齋とその時代 附・日本散瞳薬伝来史』（平成七年五月発行、思文閣出版）は先生晩年の上梓であるが、同書は同年日本眼科学会百周年の記念行事が京都市で行われる直前に刊行され、当時の小生への私信に

故 福 島 義 一 先 生

「（同行事に）やっと間に合いよろこんでいます」とあった。しかし続けて「緒方洪庵先生と同時期の蘭学者ですが、大阪のかたは余り高良齋先生を知りませぬね」とあった。福島先生によれば良齋は大阪に塾をもち、大阪で死に、大阪に墓もあつた由である。しかしその墓は後裔により徳島市に移されていた。先生は徳島でその墓を見出し、寺の門脇に彼の墓のある旨の案内をおかれ、後裔とも連絡をとられた。大阪における良齋については、中野操先生などの言及もあるもののその方面に疎い小生は福島先生の書でようやく全容を知り、大阪人

の一人として恥入った次第である。

徳島県医学史・博物学史の第一人者であった福島先生は、実は徳島県のはえぬきではない。神戸で生まれ、現在の阪大医学部の前身を卒業、眼科学を専攻された。戦時中に創設された徳島医専の教授として赴任されたのが徳島との縁の始まりだった。のち徳島市の中心部で眼科を開業、その後ついに徳島の地を離れられることがなかった。

各分科史の中でも日本眼科史の研究は最高のレベルにあるが、明治以降の眼科史学者として先生の仕事はとくに傑出していた。『眼科学史の窓』（昭和六二年）ごときユニークな著もある。他方、徳島アイバンク理事長（のち顧問）としても尽力された。日本眼科学会の名誉会員でもあり、日本医師会最高優功賞を受けておられる。

十数年前までの日本医史学会関西支部例会には屢々出席され、当時まだ駆け出しの小生にも気安く声をかけて下さり、本を出されるごとに当方へもそれを届けて下さった。

平成九年二月十一日死去。八十六歳。

（大阪府豊中市）